

# 協同学習の視点から 学校から仕事・社会へのトランジションを考える

溝上 慎一（桐蔭学園）

キーワード： 協同学習、協調学習、プロセス、アクティブラーニング

## 1. 協同の精神

ときどき読み返すものの1つに、関田・安永（2005）の初期の協同学習（cooperative learning）の定義の検討がある。各種の辞書・辞典での定義をふまえて検討し、協同学習を「協力して学び合うことで、学ぶ内容の理解・習得を目指すと共に、協同の意義に気づき、協同の技能を磨き、協同の価値を学ぶ（内化する）ことが意図される教育活動を指す専門用語である」（p. 13）と定義する（他にも関田，2004 を参照）。そして、この定義にしたがって、協同学習の4条件を次のように示す（pp. 13-14）。

- ①互恵的相互依存関係の成立
- ②二重の個人責任の明確化
- ③促進的相互交流の保障と顕在化
- ④「協同」の体験的理解の促進。

私が興味を持って読み返す観点は、協調学習（collaborative learning）が協同の精神をもとに「プロセス（過程）」を目指すものだという点である。それは「プロダクト（成果物）」との対比によって際立つ。細かく見ていけば、協同学習であれ協調学習であれ、プロセスとプロダクトの境界を厳密に引けるものではない。しかしながら、大枠として、どちらに重点を置くかは重要な出発点である。関田・安永はプロセスが一にも二にも重要であると主張するのである。プロダクトはその結果に過ぎない。

## 2. 学校から仕事・社会へのトランジションに繋げて

1960年代以降、ムラや共同体が解体され、あるいは機能縮小していきながらも、それを引き継いだ（国民国家としての）社会の縮図としての学校の教室空間が、やはり子ども・若者の生活・人生としての「ライフ」の形成の基盤であった。そこでは、他者や集団がはじめにあって、その上での個の発達があった。だからこそ、協同や対人関係などは、前提であり副次的なものであり、さほど主張されるものではなかった。

しかしながら、1990年代初頭にバブル経済がはじけ、社会や学校におけるさまざまな側面が構造的に大転換する過程で見えてきたのは、子どもや若者の関係性基盤の危うさであった。ムラや共同体の解体の裏で発達を遂げてきたポップカルチャー（マンガや音楽、ゲームなど）がますます発達し、それにコンビニやインターネット、携帯電話や SNS（LINE

など)といった充実した個の空間が加わる。ムラや共同体の機能などあるはずはなく、これだけ価値も多様化し、何でもありの社会になってきて、社会の縮図として学校への適応を求めたあの求心性をもはやないに等しい。この中で、何の(教育的)戦略もなく、子ども・若者の関係性が育つと考える方がおかしい。協同学習やアクティブラーニングはここに関わる。

うまく条件が積み重なり、社会性を高くもつ子ども・若者は他者や集団に積極的に関わり自己世界を豊かに広げようとするが、そうでない子ども・若者は周囲の「お友達」との関係だけに終始し(わかりやすい表れは土井隆義の「友だち地獄」である)、そのような他者や集団への関わりを忌避する、あるいは面倒くさがる。

これが、単に個と関係性をパラメータとする個人的な発達差の問題で済むのなら、私はここまでアクティブラーニングやトランジションなどと主唱しないのだが、それが学習力にも影響を及ぼしているのである。関係性基盤の弱い生徒学生はキャリア意識も低いことが多く、その結果学習力が弱いのである。仮に大学受験のように、目先の目標に向かって学習をすることがあっても、所詮は短絡的な功利的な目的の学習であり、それが大学に入って以降の学習力に直結しないのは、大学人は経験的に知っていることである。私が企画・実施する河合塾との10年トランジション調査(溝上責任編集, 2018)でも実証済みである。

学力が将来の仕事・社会のためにあるものであるなら、関係性の弱さは学力の弱さである。在学中は、それは学習力の弱さとして表れ、卒業後は仕事・社会で生きる力の弱さとして表れる。どのように考えても、個と協同(協働)のバランスが必要である。

一方向的な知識伝達だけではなく、グループワークや発表といった活動をもとに課題にも取り組ませるアクティブラーニング型授業を提唱してきた(溝上, 2014, 2018)。そこでの活動には他者や集団が組み込まれている。この他者や集団への向き合い方1つ1つに、生徒学生の将来の姿が見える。他者を慮り、考えること理解することを全部表現し、皆で頭を悩ませて新しい考えや思考を生み出す。そして、ときどき、生まれ出た考えや結論に「なるほど」「そうか」と感動する。

私はここに協同の精神、協同学習の原点を見ている。

## 文献

- 関田一彦・安永悟(2005). 協同学習の定義と関連用語の整理 協同と教育, 1, 10-17.
- 溝上慎一(2014). アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂
- 溝上慎一(2018). アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性(学びと成長の講話シリーズ1) 東信堂
- 溝上慎一(責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾(編)(2018). 高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題— 学事出版